



『トクシマ・アンツアイガー』

第2巻

第4号

徳島 1915年10月17日

バルカン半島

ついにバルカン半島情勢は、少なくともブルガリアが我々の側で戦争に加わることを決断した、というその限りにおいて明白になった。ルーマニアとギリシャは中立を保ち続けることを明言した。故国からの最近の情報によれば、ギリシャの中立性はもちろん少し特殊な様相を呈しているが。多数派協商諸国はギリシャのザロニキ港の中ないしは近辺に、かなりの部隊の上陸—35万人とも言われている—を企図したようである。その部隊はギリシャを通してセルビアの支援に急ぐらしい。ギリシャの多数派協商諸国寄りのヴェニツェロス¹内閣は、多数派協商諸国になされた譲歩には責任がなかったのだが退陣し、その代わりに登場した内閣の一部の構成員が既

1 E. ヴェニツェロス (1864-1936) はギリシャの政治家で、第一次大戦期を挟んで数度首相に就いた。大戦時は多数派協商諸国側に組みした。

にかつてその国の命運を導き、中立の真の支持者だった。今日でもその内閣に平和を守る意図があるかどうか、またそれがまだ可能かどうか、我々は未決定のままにしておかねばなるまい。

我々にとってブルガリアの同調は疑いなく大きな成果を意味する。我々には今やトルコとの直接的な連絡を確立することが可能になろう。その連絡網で我々は同盟国に必要な戦時物資を送り、場合によっては援軍も派遣することが出来る。その上、バルカンの混乱を終息させるためにブルガリア部隊の共同介入は重要でない訳がない。

ブルガリアの面積と人口に関する最近の数字は、残念ながら手元のここにはないが、旧ブルガリアの住人数を我々は、直近のバルカン戦争で新たに獲得したものを含めて少なくとも 500 万人と見積もっている。ブルガリアは 70 万の軍隊を設けるであろう、との情報が二、三の新聞によって流された。この数字は我々には理解しがたいほどに多過ぎるように思われるが、いずれにせよブルガリアは我々にとって最高に歓迎すべき同盟国である。

ブルガリアの決断を受けて、セルビア国境に集結している我々の新しい部隊によるセルビアの攻撃も始まった。この戦場での我々の側の最高司令官として、フォン・マッケンゼン陸軍元帥が任命された。ドイツ人なら誰にも心地よい響きのするこの名前の人物以外には、ナレヴ前線の勝利者であるフォン・ガルヴィッツ將軍の名が更に挙げられた。事柄が正しく扱われている、ということを保証する名前だ。戦争の出来事についてのより厳密な情報は残念ながらまだ手元にはないが、我々が既に知っている事は、我々の軍隊がサーヴェ川並びにドナウ川を越えてセルビア領に侵入したことだ。ベルグラードの王城にはすでにドイツ並びにオーストリア＝ハンガリーの旗が翻っている。セルビア軍との最初の衝突で、我々は既に 1,300 人を捕虜にし、大砲 20 門を分捕った。

バルカンでの最近の出来事がイギリスにどんな印象を与えたかは、日本の助力を求めるイギリスの新聞各紙の呼びかけから見て取れる。

今まで我々には副次的な戦場にしか見られていなかったバルカン半島が、大きな意味をもち始め、現在バルカン半島で進行していることは、戦争全体の経緯に大きな影響をもつことになる。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

『音楽における永遠の太陽の輝き—

その名はモーツァルト』

ルビンシュタインは、彼の著書『芸術とその名匠たち』でこう断じている。当然だ。多分モーツァルトの音楽は時に真面目な落ち着きを示すが、感情の高まり、情熱的な興奮を扱ったりはしていない。生と愛における明るい喜び、今生きていることの快活と心地よさを、その音楽は陽気さと根源的なものの中で示し、モーツァルトが遺してくれたものは、心をとらえる爽やかさとメロディーの愛らしさ、壮麗にして音楽的な美しい旋律による楽想である。

音楽同様に生きることへの満足、音楽と同様な邪気の無い朗らかさは、たとえ彼にはどれほど容易ではなかったにせよ、彼の全生涯に見られたものだった。

1756年1月27日にザルツブルクに、甚だ音楽好きの父の下に生まれたモーツァルトは、3歳の時にすでに音楽の才の片鱗を示し、4歳であらゆる類のピアノ曲を演奏し、5歳の時には既に自作のダンス曲を父親に口述筆記させた。「神童」の息子の才能から金利を引き出そうとした父は、音楽教育に出し惜しみをしなかった。ヴォルフガング及び姉のナンネルは「神童」として家にお金をもたらすはずで、正規の学校教育はいいかげんにして、まさに厳しく鍛えられた。7歳の時にモーツァルトはすでにトリオで第二ヴァイオリンを受け持った。しかし、彼はヴァイオリン以外にピアノとオルガンを弾きこなすことを学び、それにおいても名人芸に達し

た。彼は事実後に（ハイドンにしたがえば）コンサートでは全てを暗譜して演奏し、また想像を絶して聞きほれるほどに即興演奏した。楽想がただただおのずと彼の両の手からほとぼしり、その想像力が枯渇することなど決してなかった。こうした音楽的記憶力を徹底的に学び取る事を身に付けて、彼はまた作曲も行ったが、それはたいてい頭の中で完全に仕上げてから書き留めるのであった。

父の厳しい訓練は彼に沢山の精神上的知識・技能を授けた。がしかし、愛情に満ちたものは僅かであった。父は天分ある息子に対して、常に厳格にして無愛想なままで、息子のいつも変わらぬ情愛にも、決して心の籠った優しい言葉を返すことはなく、そのために息子の優しい愛に飢えた心は苦しんだ。1762年から66年にかけて、父モーツァルトは二人の神童の子を連れた旅を企て、中都市でコンサートを開かせた。小さな巨匠たちは喝采を博し、父は金を稼いだ。ウィーンの宮廷にも彼等は赴き、皇帝ヨーゼフ二世の要望を受けて、12歳のモーツァルトは3週間で喜歌劇『ラ・フィインタ・センブリーチェ』（『見てくれのばか娘』）を書いた。多分それは当初上演されなかった。歌手とオーケストラが少年の指示に従うことを拒んだからだ。しかし、その喜歌劇は後にザルツブルクで上演され、それによって若きモーツァルトは大司教のコンサートマスターに任命された。

同じ時期にすでに一連の曲が成立した。これら初期の作品では、モーツァルトはまだ従来の音楽的慣習に厳格にしがみつき、当時一般的だったイタリア語を用い、主題では甘いアリアを書き、多声的なものがまねだった。それは当時の考え方による「劇的で情熱的なもの」は個々の歌唱の中でのみはっきり形をとり得るという原則にならったのである。彼は浅薄な時代の趣向に順応したが、当時の時代趣味はドイツにおいても、月並みな、耳をくすぐるだけのイタリア音楽の後を追っていたのである。それは作曲家が後を追及するような高尚な目標ではなかった。宮廷の祝宴、プリマドンナのアリア用楽譜、音楽つきの宴会といったもので退屈を紛らわす上流社会の流行、それらが作曲の動機だった。こうした作品にあっても愛すべき、

心地よい軽快なロココという時代の反映を眺めることができる。

ほとんど信じがたいほどの易々とした創造力でモーツァルトは、21歳までにすでに300曲以上を作り上げ、その中にはあらゆる形式のオーケストラ音楽と室内楽が含まれていた。かくして彼は1771年と1772年にイタリアでいくつもの祝祭劇と三幕のオペラを無造作にやってのけた。ある祝祭劇のための14のアリアの要求を12日で成し遂げた。彼は何でも簡単に片付けることができた。彼の上下の部屋での熱心なヴァイオリン奏者たちが練習し、その一方で脇では合唱指導者が授業をし、また向かいでは一人のオーボエ奏者が楽器をしんみり鳴らしたりしても、モーツァルトが作曲することの妨げにはならなかった。もっとも、彼がさらさらと作曲したのは、軽めの音楽作品ではあったが。ともかくもそれが要望され、受け入れられた。すでに1770年にはあるオペラがミラノの舞台で20回繰り返し上演された。教皇はその年彼に金拍車勲章を授けた。

つづく

日本の磁器（4）

薩摩焼は硬さにおいても色調においても様々である。かなり硬度で、象牙の様な色合い、蠟のような光沢をもつ磁器のような物があるし、また硬さは少なく、白墨様の陶器に似ている物も存在する。最も古く、最も珍しい物は実に小さい。それらはくすんだ色調の簡素な花柄模様金に所々に散りばめて絵付されている。最も評価されている作品は、豪華で丹念に彩色されて金を惜しげもなく用いた物である。近代の作品は概ね鳥や花を描いている。薩摩陶器はヨーロッパ人にも日本人にもとても評価されている。最良の作品は18世紀頃と19世紀の初頭に製作された。日本の商人は収集家の無知に付け込んで、贋作を本物として売った。こうして例えば東京から、古めかしい感じを与える大きな花瓶や火鉢が、本物の薩摩焼として外

国へ売られたが、その大きさと聖人やその類を施した絵付けからして、ごく最近の贋作であることを明瞭に証明していた。全く同じように、至極現代風の京都物が薩摩として売られたが、つやのある釉、茶色っぽい色調及び透過性の素材は、薩摩との違いを容易に感じさせる。

尾張の磁器産業は比較的歴史が浅い。そこではすでに古くから壺製品の製造が活発に行われた。主たる製造場所瀬戸に因んで、陶器食器、陶器及び磁器は日本では一般的に瀬戸物と呼ばれた。19世紀の初め、有田（肥前）で磁器の製造を学んだ瀬戸出身の一人の壺職人が、この産業を故郷に持ち込んだ。磁器の色彩に富む絵付けにおいて、肥前の陶工に迫ることに成功しなかったとはいえ、青色での下地釉は完璧なほどに成功したので、青の絵付けが尾張の主要産品になっている。それと並んで名古屋においては、1870年以來いわゆる磁器による七宝焼の生産が発展した。1868年の維新後大名の蔵から陽の目を見ると、当初は古い七宝焼の模倣が試みられた。しかも銅や磁器への試みが行われた。かつての完璧さに達することが出来なかったので、銅への七宝焼は名古屋でじきにまた断念された。製造は東京でフランス人の指導の下、中国風の仕方ですこぶりと続けられた。これに対して磁器による七宝焼の生産は、まもなく著しい広がりを見せ、すでに1878年のパリ博覧会では夥しい数の七宝焼の花瓶や茶碗と皿が飾り立てて陳列された。

つづく

図書室

我々の図書室にいくつかの基金のお陰で新たに28冊が搬入された。特に言及しておく必要があるのは、マーゲナー二等砲兵を通じてハンブルク・ドイツ作家記念基金から我々に送り届けられた価値のある本で、それに対して我々はこの場を借りても収容所全体からの満腔の感謝を述べたいと思

う。我々の図書室の規約、取り分け特に読む価値のある本の一覧表は、近々の号に掲載する。

第 23 回コンサート

1915 年 10 月 7 日

演奏曲目

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1) オペラ『ドン・ジョヴァンニ』序曲 | W.A. モーツァルト |
| 2) ヘ長調の旋律 | ルビンシュタイン |
| 3) リーゼロッテ、ガヴォット | アダム |
| 4) 愛の夢、間奏曲ワルツ | ベッカー |
| 5) 帝国第 1 水兵師団奉祝行進曲 | ハインリヒ・フォン・プロイセン皇子殿下 |

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 51 問の解答

1. Db7 - a6 任意の手
2. D, Sa4 - c5 詰み
- 52, 1 Ke4 - d3
2. Ld7 - g4 + Kd3 - c2(e4, e3)
3. Dd8 - d1(d4) 詰み

他の変化も容易

第 52 問の解答

1. Dg5 - d8 Ke4 - d5(x e5)
2. Dg8 - h4 任意の手
3. Dh4 - d4 詰み
1. Ke4 - f3
2. Ld7 - g4 + Kf3 - e4(e3)
3. Dd8 - d4 詰み

第 51 問の正解を送ってきたのは、ヨーゼフ・ヴェーバー、ベーマー及びバウムガルテン。

第 52 問に対して送られてきた解答は、 $1 \dots g7 - g6$ で詰むことが出来ない。

第 53 問 白：Ke1, Db7, Tg3, h3, Lh8, Lg2, a5, Bf5, h4

黒：Ke4, Sg3, Bd5, d6, f4, h5, h6

2 手詰め

第 54 問 白：Kc3, Db1, Lb1, Sd5, g6, Ba4, a5, c6, g4

黒：Kd6, Lg8, Be3, f7

3 手詰め

灰緑色の制服の海軍（2）

この戦闘中にいた者は、誇りをもった友軍部隊の戦友たちをちらちら眺めることができた。今日なお海軍所属のキラキラ輝く瞳の彼らの体の中では、師団参謀本部が最初の戦闘の夜更けに、後備軍旅団司令官を協議のために如何にして探し、またフォン・マイヤー陸軍中將をその最前線の外哨で砲火を浴びているのをいかにして見つけたかを、物語るときに心が躍っているように思われる。深刻な、血なまぐさい日々が戦闘を嬉々として喜ぶ、この上なく気骨のある軍人たちを引き合わせたことは稀である。彼らは指導者として、自分たちの示す手本のみが、敵の絶えざる突撃に対して揺るぎなく耐えさせることが出来ると感じていた。そこに提督がいた。彼は後に、敵の駆逐艦を追い散らすべく両手を腰につっぱり、ちっぽけな水雷艇用の砲を従えて大股でオーステンデの海岸へ進み出た。そしてフォン・マイヤー陸軍中將はその勇敢な心の思いを満たして、終には勝利に富んだ戦闘の最前線で英雄的な死を遂げた。

9月の終りにその海軍師団は第3予備軍団に編入された。フォン・ベーゼラー海軍大將は参謀宿營の参謀本部を訪ねて、部隊をアントワープの占領地に振り向ける考えであることを説明し、次のようなことを述べた。「師団を最も容易な任務へ配置することはもちろんしないが、任務の遂行はすでに血を流して証明した陸軍と海軍との間の戦友意識を、歴史的な戦闘行為によって確証するであろう」。

そうした言葉は兵士たちを発奮させた。師団が北へと敵にむかって進軍したとき、心臓はいっそう高鳴った。突撃の手を挙げて彼等はメヒェルン郊外の敵の陣地を奪い、敵をメヒェルン市街地へ追い込んで押し返した。一方イギリス人とベルギー人は榴弾砲で街道を撃ちまくった。大火炎がまだその地で燃え盛っていた戦闘の二日目の晩、水兵たちが大聖堂の上の軍旗を掲げ、メヒェルンで師団参謀本部は宿營に移った。

今やヴェルヘルム要塞攻撃に着手し、師団は3、4日その強力な堡壘をめぐる戦った。激しい銃火の下師団は、徐々に当初の正面攻撃をさしあたり砲攻撃に変えた。我々の第42師団が活動していたとき、向こうで白旗が上がり敵は逃走しようとした。騎馬砲兵隊の大砲が榴弾で敵の退路を塞いだ。敵は降参し、そして再び帝国戦闘旗が敵地と戦果の上になびいた。

再度の要塞への激烈な攻撃により、海軍師団はおおいに前進できた。湿地帯を通過して師団は、大砲と機関銃を備えた常備陣地に向けて困難な道を切り開いた。じめじめした大地は克服しがたい障害となっていたが、予備軍団の作戦地域を通過して前に突き進みつつ、師団は右翼から敵を包囲してほぼ敵の陣地の背後に達した。敵の逃走後、累々とした多くの死体は海軍歩兵隊と水兵連隊の優れた射撃を物語るものだった。死体の脇にはなおベルギーの慣習にならって私服の入った小包が置いてあった。

それから我が軍の大砲が町に向って撃たれた。町を守りたいという願望が市の長老たちをメヒェルンへと、そして降伏へと導いた。

灰緑色の制服を着た者たちがラッパを吹き、太鼓を鳴らして飾りたてた勝利の行軍ではなくて、冷静で実務風の行進でわれらが部隊はアントワー

プへ進んだ。防御帯を打ち破って、すでに陥落前に町への道を切り開いていた偵察隊と前衛部隊の後を、個々の司令部、大隊及び連隊が付き従った。ただ、ここかしこで楽器が奏でられた。水兵連隊は防御のために再び堡塁を築くべく、ただちに北の海辺とシェルデ河畔の要塞へ進軍した。彼等が喜んだことには、船乗りたちは水の上での仕事をすることができた。避難していた住民たちは家に戻ることを望んだが、道は閉鎖されていた。船頭として昼夜避難民たちを、見事な家具、猫、鶏、子牛とともに蒸気船に乗せて彼等の住んでいた場所の岸辺へ運ぶとき、水兵は笑いながら水を得た魚のように感じた。

占領陸軍部隊はその間ベルギーを通過してイゼール川へ向って進軍した。海軍は彼等の側面擁護のためにフランドル地方の海岸の要塞化を始めた。アントワープ滞在 10 日後、師団は西へ向けて行軍した。師団はツェーブリュッゲ、ブランケンベルグ及びオーステンデを占領したが、敵の攻撃に対する海岸線の防御のために、当面はアントワープで^{ろかく}鹵獲した大砲を据えることができなかった。水兵は再び銃を脇へ置いて地上任務として、砂丘の砂の中に砲台を築いた。時間を損失してはならなかったことは、イギリス軍によるツェーブリュッゲの水門と堤防への砲撃が証明した。海軍歩兵隊は我々の西部戦線の右翼に活動場所を見つけた。そこで戦っている後備軍旅団は 11 月 8 日に師団に編入された。フォン・シュレーダー海軍大將はロンバルツューデを奪い、敵をニューポールへ押し返すことを決意した。11 月 9 日の午後、レッシング陸軍大佐は海軍歩兵旅団の第 5 及び第 8 大隊に後備軍連隊を、ミッデルケルケーロンバルツューデ間の街道の南の陣地で交代させる命令を受け取った。第 1 大隊は街道の北の陣地へ移動した。敵は前線の手前 300 メートルから 400 メートルの所にいた。師団の残りは予備軍としてミッデルケルケとヴィルスケルケ近郊にすでに準備を整えたまま配置されていた。

つづく

愛するアンナ

この手紙を書きながら僕は憤っている。というのも君は、塹壕に横になって敵の豚腹肉を奪うのとは、違ったようなものを戦争に期待しているからではと書いてきた。そしてぼろ靴下が二つ同封してある。君、それは片付けたまえ。それは素人が頭の中で考えるほど、そんなに簡単ではない。でも専門家なら知っている。その戦術は狡猾なもので、恐らく100人の料理女のうちの一人しか気づかない。君はこんな手紙を書くほどだから、その一人ではないように僕には思える。だけれども僕は君に、そこには湿った粘土があるんだと伝えなくてはならない。もし誰かが毛糸の靴下をもっていないとすると、そいつは犬も泣き喚く坐骨神経痛を喰らってしまう。何故なら毛糸の靴下は魂なのだ。もし誰かが君に、ぼろ靴下は魂だ！と話しても、そうやすやすと信じてはいけない。ぼろ靴下は誤りだ。僕はもうこれ以上格言を弄するつもりはない。僕が言うのはただ、もうぼろ靴下を送って寄越すのは止めて欲しい。出来ればそれでスカートを作ったらいい。でも君が僕に愛の贈りものを示したいなら、中尉殿にその妹たちがしたように、毛糸の靴下を編むことだって出来るんだから。でも違う。何故ならこの毛糸の靴下は、中尉殿が言っていたように、もし袖がついていたらコンビネーションになれるくらいだから、時間のかかる仕事だった。何故なら毛糸の靴下は魂だから。

愛するアンナ！これはしかしまだ全てではない。ある軍略のせいで、僕は心に残る痛手を蒙り、実に腹立たしい。つまり、僕が偵察に出ていた時だった。この偵察は多分、君が枢密顧問官の元で学んだようなものとは別物だ。何故ならそこでは単に頭越しに扉がばたんと強く閉まるだけだが、戦争では弾丸だ。

そして僕はぶつぶつぶやく声を聞いたので藁人形をつくり、そこに僕の上着を掛け、僕のヘルメットを被せた。この人形へおびき寄せて包囲す

るために。しかし僕が戦略的な回避をしている間に、敵はこの藁人形へやって来てそれを捕まえた。僕が現場に戻って来た時には、人形は無くなっていた。他方彼等は待ち伏せ場所から銃火を開き、僕の長靴を撃ち抜いた。僕が非常な恐怖を感じたことは君も思い浮かべてくれるだろう。というのも上着には僕のパイプがあったんだ。こいつらが僕よりも早く走ることが出来たので、僕はそのパイプを取り戻せなかった。ところで君はもう充分知っていると思うけれど、この同じ奴等が新聞では大勝利と書かれている。

君が緑のテーブルについている時に想像するのと同じくらい、ここでも簡単だなどとはもう考えないでくれ。何故なら愛するアンナ、ひどい目にはいくらでも会っているんだよ。単に銃撃される、銃剣で撃たれるといったものだけではなくて、時おり全く別なことが行われるんだ。君がそれを眺めたら、哀れみでいっぱいになって君の髪の毛が総毛立つかもしれない。というのも三日前、交替した僕たちは睡眠をとるために最前線の塹壕から後方へ移動した。しかしその時僕たちは見事に騙された。ここでは雪が激しく吹き荒れていて、点呼の際にパトロール任務の要員数人はスキーの訓練を受けることになるとの命令が出された。その時中尉殿はこう言った。クネチュケ、これは君の身体のためになる仕事だ！それで僕は今日午後他の数人と一緒にスキーの任務に就いたのだ。君、このことは笑い転げて死ぬような冗談では決してないかもしれない。というのも彼等は羽目板のような二枚の板をもっているが、君のところの台所で上に弁当箱が置いてあるようなそんな板だ。僕の長靴にその板を縛りつけると彼等は、それ！と言った。愛するアンナ！すると片方の羽目板がまさしく前方へ滑り出て行った。しかしもう片方は後ろへ滑って、僕は横へひっくり返った。そこで僕はすぐにこれは斜めに行くものだろう、と分かったことは君も信じるだろう。でも、もし君が板を長靴に縛っても、何も出来はしないよ。で伍長は再び僕を起こして、こう言った。真っ直ぐ立て、クネチュケ！俺が押しやる。こう言うと彼はぼくの背中を押し、僕はちょうど通りかかった砲兵中隊の中へ矢のように飛び込んだ。しかしまだ全てはうまく運んでい

た。ただ砲兵たちがスキーを山の上へ引きずり上げてくれ、頂上で僕は長靴にスキーをくくりつけ、それから彼等は僕を下へ向けて走らせた。銃撃を受けなくても、これでももう君は戦争が娯楽だなんて考えないだろうね。むしろ君は飲み込んでいるだろう、僕が雪の中で腹ばいになってこの手紙を書いていることを。衛生兵が来て、脚から板を外してもらえるかどうか分からないからね。

愛するアンナ！お願いだから、僕がまたすぐに塹壕に行けるように祈っておくれ。これは現実のことで、長靴に板がくっついている必要なんかないんだよ。こんなことをしてたら首を折っちゃうよ。

この願いが成就することを期待して、キスを送る

君を心から愛するハインリヒ・クネチュケ



我々の通信員が次のように我々に書き送ってきている。

時に報告は実に様々である。

何故なら、新聞の記事執筆者は純粹そのものの詩人で、
蚊から象を作り出し、

またちよくちよく出来もしないことを主張する。

先ず第一にフランス人のお気に入り新聞には
時折実に多すぎる嘘が書かれている。

絶えず行軍はベルリンへ向い

そんな時の進軍はまだ自国の中だ。

ロシア人ときたら鳥を撃って

我々に彼等が報道することは紛れもない脚注で

9日にはもう熊を一頭やっつけたが

その熊は12日にまだ捕まっていない。

さてイギリスでやっとなフォン・ロイター氏

この男が我々に発するのは時に陽気だ。

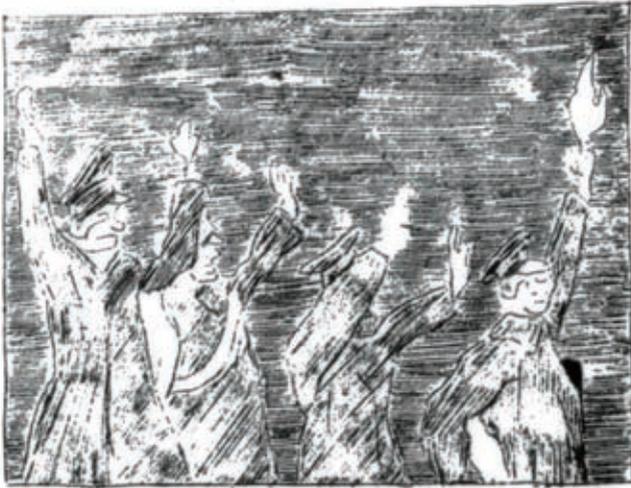
何故なら彼は新聞の勝ち進み
競争から離れて先ず嘘つき大賞を書き下ろしている
このことを私は心を痛めて感じた
そして私は密かに考えた、やはり先ず伝えられねばならない
実際報道記事はどんな風に見られるのか
そこで私は機械を手にとってそれからパチリと写した
大いに喜んでいることには
親愛なる読者諸君私が君たちに今日送るのは
書かれた通りの報道で、
その脇に置いたままの写真だ
これで事実その違いは多分明らかだろう
そして君たちは何が嘘で、何が真実か気付くのだ。

あるフランスの報告から



我々の戦略的位置は飛び切りだ。

ロシアの報告



我々の息子たちの精神と進んで捧げる犠牲心は
全てに勝って崇高である。



我々の勇者たちの誰もが
最近の戦闘で豊かな戦利品を獲た。

イギリスの参謀本部報告から



我々の部隊は絶えず
最前線にある。



我々は土地を獲得した、がしかした
若干の地帯は敵の手に引き渡せねばならなかった。